

神栖・鹿島

花ヶ崎城址

中世館址の特色示す

神栖町萩原の旧道を少し入ったところに「花ヶ崎城址」がある。

四方田んぼに囲まれ、小高い方形の場所が館址である。

正面入口に「史跡花ヶ崎城址」の標柱があるが、「館址」といった方が正しい。典型的な中世の遺構である。

現在、浄動院（真言宗智山派）で無住である。

境内は概ね間口七十呎、奥行六十呎（四千二百平方呎）のほぼ方形館址に近い。

寺の改築記念碑には、近くにあった不動院を合併している。

開山は永禄十年（一五六七年）とある。

遺構は四方土塁（高さ約一呎）をめぐらし、堀（現在は田んぼ、水壕）は四方を囲みよく残存しており、堀の幅は約二十呎である。

神栖町史などによれば、城（館）主は、花ヶ崎氏（萩原氏）と伝えている。

花ヶ崎氏は、桓武平氏の末流で常陸大掾（だいじょう）、鹿島氏の支族といっている。

香取文書の「海夫注文」に花ヶ崎氏の名が見えるが、中世、室町時代には鼻ヶ崎（花ヶ崎）の津を知行し

ていたことがわかる。

また、境内墓地に「花ヶ崎宗家追遠之碑」（高さ一・五尺、幅九〇^{センチ}）があり、子孫により建立されている。碑文には、宗家の祖先は、光仁帝（第四十九代光仁天皇）の御落胤（側室の子）にして弘仁元年（八一〇年）萩原の里に居城、花ヶ崎日向守と称し五十三力所の所領（知行地）を持つていた」とある。

そして、永禄元年（一五五八年）には嫡子・千代寿丸が知行していたが、天正十六年（一五八八年）戦災により落城し、百姓として四郎兵衛と名を改め、子孫は存続していたが、昭和四年（一九二九年）に絶家したと記してある。

この変遷を見てみると、花ヶ崎館址の築構は、技法が中世館址の特色を持つている。

しかし、碑文にある築構は弘仁元年とあるが、築法からみて、南北朝のものと考えられる。そうしてみると築館は約四百年ものズレが生じてくる。

また、落城も天正年間としているが、これは誤りで、寺の開山が永禄十年であるので、寺は居館が廃された後建立したものである。

随って廃館は「永禄」以前と見てよく、戦国時代の初期ごろと推定できる。

こうしてみると以上のような年代のズレを推測してみると歴史的に符合する。

この地域には現在でも「花ヶ崎」姓を持つ氏族が多いことは城（館主）との関係があつたことを物語っている。

そして私が調査におもむいたとき、地域の老人クラブの人たちが寺を清掃作業中で汗を流していたのも何かの仏縁かと思われた。